

地域を知ろう(37)

民話・伝説

No.17 金燈籠

妙法寺旧道の

金燈籠

旧妙法寺道入口に、しばらく姿を消していた青銅の燈籠が、最近よそおいも新たに復元しました。

一基は蚕糸の森公園正門入り口、もう一基は、旧道を挟んで反対側、文房具店前にあります。

ここに燈籠が出来たのは、かつて妙法寺新道といわれた頃、この道が源J R中野駅からこの最短距離として開通された明治三十六年に建立されたもので、今も、当時の、今のような青銅ではなく、木製のものでした。

そもそも妙法寺道は鍋屋横丁から分かれ帝釈天前を通って妙法寺門前へ至る道をいったものです。JR中野駅が出来（当時は甲武鉄道）たことから、豪商で熱心な日蓮宗信者だった人が参詣者の便を考えてこの

道路を造りました。農道を整備してつくられた道は下町方面から来る人に大変喜ばれました。



この道路の開通を記念して建てられた燈籠は、明治四十三年八月に今のようにな立派な青銅のものに建替えられました。夜の通行人は、この常夜灯を大変便利に思ったことでしょう。その上この燈籠から今の環七合流点までの新道両側には、桜の木がずらりと植えられ、花見時は、この「サクラトンネル」を通ってお参りに行くことになりました。環七の合流する蓮光寺の先には、池のある古いお茶屋があり、池をながめながら焼きだんご等を食べ、一休みをした人もありました。

青銅燈籠は、大正の大震災や戦争

で被害を受けましたが、往時の姿をそのまま見せています。柱に刻まれた字を見てくたさい。今はもうなくなってしまうた懐かしい江戸の町名や、寄贈した人々の名が読み取れます。



今は道の両端に植えられた桜の木もみな伐られ、桜新道という名も人々の口から聞かなくなっています。